

茨城県稲敷郡江戸崎町

楯の台古墳群

第2・3次発掘調査報告書

2001

江戸崎町教育委員会
山武考古学研究所

発刊に寄せて

古い歴史と伝統を持つ江戸崎町には、数多くの遺跡が残されています。平成10・11年に行われた町内埋蔵文化財包蔵地分布調査により、遺跡数が従来の3倍に相当する161ヶ所に及ぶことが確認されました。今後、それらの遺跡が発掘調査され、古代の江戸崎町の様子が、次々と明らかになり江戸崎の歴史や文化研究の資料になることを想定すると極めて貴重な価値を持つこととなります。

その価値ある江戸崎町の遺跡の一つに、今回掘の台古墳群（2・3号墳）及び、十数軒の住居跡や出土遺物が加えられることになりました。本書は、有限会社仲東興業の土砂採取事業に伴い、平成10～11年に町教育委員会が山武考古学研究所に発掘及び整理を依頼し実施された調査の報告書であります。

これを機会に、文化財に対する認識が益々深まり、これらを通じて郷土を愛する心が培われるよう希望するものです。最後に、本書をまとめるまでに、多くの方々のご協力とご支援を頂きました、それらの方々に衷心からお礼を申し上げて、発刊の言葉といたします。

平成13年3月

江戸崎町教育委員会

教育長 朝比奈克巳

例 言

1. 本書は、土砂採取事業に伴い事前調査が行われた、茨城県稲敷郡江戸崎町に所在する掘の台古墳群(町遺跡番号022)の第2・3次発掘調査報告書である。
2. 調査は、(有)仲東興業の委託を受けた山武考古学研究所が江戸崎町教育委員会の指導のもと実施した。
3. 遺跡の所在地・面積・期間・担当者は下記の通りである。
所在地 江戸崎町大字佐倉字掘の台2728外(2次)
江戸崎町大字佐倉字掘の台1926-7外(3次)
面積 1,470m²(2次)
1,950m²(3次)
期間 平成10年10月24日～平成11年2月6日(2次)
平成11年11月4日～平成11年12月4日(3次)
担当者 平岡和夫 高野浩之
4. 本書の編集及び整理調査は、間宮正光・高野浩之が担当し、平岡和夫が総括した。
5. 調査に際しては、下記の諸氏・諸機関にご指導ご協力を賜った。(敬称略・順不同)
木村謙一 廣澤登 井戸賀信夫 吉田芳男
茨城県教育委員会 (有)仲東興業
開成測量所 江戸崎町文化財保護審議会

目 次

発刊に寄せて	
例言	
目次	
I 調査に至る経緯	1
II 調査の方法と資料の取り扱い	1
III 歴史的環境	
江戸崎町の遺跡	5
掘の台古墳群の概要	7
IV 検出された遺構と遺物	
遺構と遺物の概要	11
古墳	15
集落	19
城館	33
V 所見	34
抄録	
調査参加者(順不同)	
沼崎徳治 河村武森 足達三郎 外村正夫	
木野内達子 浦橋邦夫 宮本松子 篠崎みつい	
田中カヤ 吉田教子 赤井スミ 池田たか	
柏尚江 木村節子 吉田京子 古川岳彦	
高橋美和 山本論 小野寺勝美 小角みや子	
荒井ルリ子 坂本実 石井百々子 佐藤洋子	

I 調査に至る経緯

平成10年7月3日に有限会社仲東興業から土砂採取事業計画に伴う埋蔵文化財取り扱いの照会があり、周知の遺跡である桶の台古墳群の2・3号墳にかかるため、8月25日に町文化財保護審議会を開き、予定地の踏査及び昭和61年に刊行された『桶の台古墳群発掘調査報告書』（第1次）の4～7号墳との関連性などについて検討され、事前の調査の必要性が指摘された。その旨を事業者に回答をし、協議が重ねられ、事前の発掘調査を実施して、記録保存することに決定した。

次いで、山武考古学研究所に調査日程の調整を依頼するなど調査の準備が進められた。そして、11月に調査計画もでき、茨城県教育庁文化課文化財担当の指導助言を受け、山武考古学研究所への委託契約も整い県への埋蔵文化財発掘調査の届け出を経て、10月24日から翌年2月6日まで第2次発掘調査が開始された。

更に、平成11年5月31日に同社から土砂採取事業の隣接地への拡張計画が表明され、従前の経過を経て、9月に確認調査の結果、遺構の存在が判明し、関連遺跡との位置付けによって、11月4日から12月4日まで第3次発掘調査が行われた。

なお、1号墳に隣接する上土及び甕状の部分については、試掘の結果、中世の防御施設（佐倉堀）の遺構との判断から、計画を変更し、現状保存することとなった。（江戸崎町教育委員会 平田満男）

II 調査の方法と資料の取り扱い

発掘調査に先立って、桶の台古墳群が立地する台地の踏査を行ったところ、従来周知されていた古墳2基に加えて集落跡の埋蔵が想定された。第2次調査では、2・3号墳を、第3次調査では、集落跡確認のための試掘を実施し、遺構が認められたことにより、この部分を拡張し調査を行った。更に、台地東部分の開発が予定され、この地区は、城館の主郭部にあたり、城館に伴う構台の可能性が高いものの8号墳が位置していた。このため、事業者の協力を得て、江戸崎町文化財保護審議会を中心として試掘調査を実施したが、空堀跡が確認されたことで、開発区域から除外することとなった。

調査は、公共座標及び水準点を設置し、これを基準に進めた。

古墳については、現況測量により、2号墳が円墳、3号墳が前方後円墳と想定され、東西南北方向に十字にトレンチを掘り下げ調査を開始した。掘り下げにより封土の状況を確認した後、表土の除去に取りかかり、主体部については、実測と写真撮影により記録を取りながら慎重に進め、航空写真を撮影した。

住居跡及びその他の遺構については、地積土層を観察しながら、土層断面図・遺物分布図・平面図などの実測と写真撮影とで調査工程を随時記録した。

整理調査は、発掘により得られた資料と遺物収納箱35箱分の出土遺物を対象に実施した。調査が土砂採取事業で、資料数が多いことから紙面上の制約があり、このため、整理調査は成果報告は言うまでもないが、その後の調査資料の活用に重点をおいた。報告書の作成にあたっては、調査記録の簡潔な提示に主眼をおき、古墳・集落・城館に分けて記載し、特に集落は、各住居跡を時期毎に掲載した。遺物については、器種構成の明示を目的とし、時期の判断には、須恵器に重きをおいた。なお、挿図の縮尺及び凡例は、その都度図中に示している。遺物の取り扱い及び注記の仕様などの詳細は台帳に記載しているが、遺物の水洗については、鉄製品を除いたすべてに対して行い、注記は可能な限り実施した。接合・復元は、その後の展示などの活用と、調査記録としての個体数把握のため、報告書使用の有無にかかわらず行っている。これらの資料については、本書作成後、台帳により検索可能な状態で、江戸崎町教育委員会が保管している。



第1図 江戸崎町の遺跡 国土地理院作製2.5万分の1「江戸崎」を5万分の1に縮小

第1表 江戸崎町の遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	遺跡番号	遺跡名	所在地	種類
001	江戸崎城跡	江戸崎字大宿甲3191外	城跡跡	055	池平遺跡	佐倉字池平1407-1外	包蔵地
002	堤原塚古墳	江戸崎字宮之602外	包蔵地・古墳	056	狹平遺跡	佐倉字狹平2122外	雑草
003	芝田古墳	江戸崎字宮之626外	包蔵地	057	泉久保遺跡	佐倉字泉久保575外	雑草
004	明徳貝塚	犬塚字二本松1248外	包蔵地・貝塚	058	中倉倉貝塚	佐倉字中倉倉1779外	雑草・貝塚
005	穴貝塚	江戸崎字法蓮寺526外	貝塚	059	八山遺跡	船崎字山860-1外	包蔵地
006	村田貝塚	村田字山後291-1	貝塚	060	天母久保遺跡	佐倉字天母久保1626-1外	包蔵地
007	魚ヶ谷城古墳	羽賀字新館1352	古墳	061	城ノ内遺跡	佐倉字城ノ内1665-1外	包蔵地・城跡跡
008	光地遺跡	羽賀字光地1268-1	古墳	062	長塚遺跡	佐倉字長塚330外	包蔵地
009	小杉岡古墳群	羽賀字小杉岡1616	古墳群	063	松巻遺跡	佐倉字松巻3297-11外	包蔵地
010	大古墳	羽賀字八瀬1881外	古墳	064	原田遺跡	佐倉字原田2467-3外	包蔵地・古墳
011	樺見塚古墳群	下若山字荒原1726外	包蔵地・古墳群	065	佐倉原遺跡	佐倉字佐倉原3119外	包蔵地
012	下山島地寺跡	下山字富士台2521外	寺跡跡	066	寺山遺跡	佐倉字寺山2979外	包蔵地・貝塚
013	浅見山古墳群	沼田字赤前1106-1	古墳群	067	赤巻塚古墳	佐倉字赤巻塚3094-1	古墳
014	神田遺貝塚	小賀字神田遺690外	包蔵地・貝塚	068	穂原古墳跡	古波字穂原台5336外	包蔵地
015	白藤岡遺跡	沼田字白藤岡3361-1外	包蔵地・古墳	069	佐倉北前田遺跡	佐倉字佐倉北前3061外	包蔵地・生煎跡
016	大尾倉遺跡	沼田字大尾倉1856-2	包蔵地・古墳	070	外崎古墳	江戸崎字外崎458-35	古墳
017	南平貝塚	佐倉字南平2350外	貝塚	071	新山古墳跡	江戸崎字新山甲841外	包蔵地・古墳?
018	山手貝塚	佐倉字山手1522外	貝塚	072	新山遺跡	江戸崎字新山甲960外	包蔵地
019	天神山古墳	佐倉字山中甲1621	古墳	073	大塚遺跡	大塚字大塚村社1369外	包蔵地
020	小笠原古墳	佐倉字小笠原896-2外	貝塚	074	八幡台遺跡	大塚字八幡台1176-1外	包蔵地
021	丸根遺跡	佐倉字丸根1509-2外	古墳・城跡跡	075	大門遺跡	大塚字大門553-1外	包蔵地
022	橋ノ台古墳群	佐倉字橋ノ台1825-1外	雑草・古墳群・城跡跡	076	荒野遺跡	大塚字荒野467外	包蔵地
023	佐倉原古墳群	佐倉字佐倉原3045-1外	包蔵地・古墳群	077	芝ヶ谷遺跡	江戸崎字芝ヶ谷甲4344-11外	包蔵地
024	藤原貝塚	藤原字中島120外	貝塚	078	花畑遺跡	月前原字花畑972-9外	包蔵地
025	大塚山古墳	藤原字大塚420	古墳・塚	079	新畑塚	月前原字新畑塚387-1外	塚
026	糠屋の塚古墳	糠屋字台1747-1	古墳	080	柳屋遺跡	月前原字柳屋1226-1外	包蔵地
027	差田貝塚	高田字差田海内	貝塚	081	辺田平遺跡	邊ヶ山字辺田平287-1外	包蔵地
028	中野貝塚	高田字中野海内	貝塚	082	中野遺跡	邊ヶ山字沼田台238外	包蔵地・貝塚
029	藤原貝塚	駒塚字戸上606外	包蔵地・貝塚	083	松谷遺跡	邊ヶ山字松谷927外	包蔵地
030	邊ヶ山貝塚	邊ヶ山字戸上628外	包蔵地	084	上ノモ子塚	邊ヶ山字上ノモ子1189-1	塚
031	沼田貝塚	沼田字神田2077-6外	包蔵地・貝塚	085	原内遺跡	邊ヶ山字原内1172-2外	包蔵地
032	二の宮貝塚	佐倉字二ノ宮508-2外	雑草・墓・貝塚	086	土口平遺跡	邊ヶ山字土口平1236-1外	包蔵地
033	セケン貝塚	佐倉字浅原	貝塚	087	赤形遺跡	沼田字赤形988-2外	包蔵地
034	高岡貝塚	高田字大目325	貝塚	088	立直し遺跡	沼田字立直し2658-1外	包蔵地
035	谷田貝塚	佐倉字佐倉原3065外	貝塚	089	二重塚遺跡	沼田字二重塚924-2外	防風
036	駒台古墳群	駒塚字並木250外	無名塚	090	赤形塚	沼田字赤形3237-1	塚
037	中塚遺跡	村田字中塚甲3901外	包蔵地・古墳群・城跡跡	091	泉久保遺跡	沼田字泉久保774外	包蔵地
038	大古墳	羽賀字大目1111-2	古墳	092	時崎平遺跡	時崎字平845外	包蔵地・貝塚?
039	羽賀城跡	羽賀字新館1102-2外	城跡跡	093	宮後遺跡	時崎字宮後707外	包蔵地
040	中城古墳	羽賀字中城1568	古墳	094	沼田甲中城	沼田字甲中城2398-1	塚
041	大目塚古墳	松山字大目塚2772	古墳	095	新明平遺跡	時崎字新明平75外	包蔵地
042	山ノ古墳	下若山字山ノ3305-1	古墳	096	塚本遺跡	沼田字塚本1040-1外	包蔵地・古墳群
043	大塚古墳	上若山字大塚2409	古墳	097	中道遺跡	沼田字中道1253外	包蔵地
044	沼田古墳群	沼田字沼田口3492外	古墳群	098	沼田遺跡	沼田字沼田口3461-2外	城跡跡
045	泉久保遺跡	小賀字泉久保1-4外	包蔵地・古墳群	099	高台古墳群	沼田字高台1728-1外	古墳群
046	上ノ古墳	時崎字上ノ255-1	古墳	100	轉作古墳跡	沼田字轉作台1644-1外	包蔵地・貝塚
047	東前古墳群	時崎字東前619外	古墳群	101	沼田城遺跡	沼田字沼田後1624外	包蔵地
048	辺田古墳	邊ヶ山字沼田台237-2	古墳	102	沼田城跡	高田字駒台2790外	包蔵地
049	長塚内墳	佐倉字長塚326	内墳	103	古輪塚	江戸崎字古輪乙1238	塚
050	藤原古墳群	佐倉字藤原1891-2外	内墳群	104	御船北遺跡	江戸崎字御船南3620外	包蔵地
051	大目山内墳群	古波字大目山1908外	雑草・塚	105	御船遺跡	江戸崎字御船南3655外	包蔵地・貝塚
052	桑山古墳群	桑山字上ノ3306-2外	内墳群	106	原入日遺跡	江戸崎字原乙368	塚
053	桑川遺跡	佐倉字桑川2662外	桑林跡	107	沼田遺跡	江戸崎字沼田乙362-2外	包蔵地・貝塚
054	日向古墳	馬崎字日向306	古墳	108	兜松遺跡	江戸崎字兜松428外	包蔵地・貝塚

Ⅲ 歴史的環境

江戸崎町の遺跡

遺跡の所在する江戸崎町は、茨城県の南部に広がる、縄文期の海進海退や小河川の開析により形造られた、標高20m前後の稲敷台地が大部分を占める。調査が行われた稲の台古墳群は、第1図からも窺われるように小野川に面した台地上に位置する遺跡で、周辺には、縄文時代から中世に至る様々な遺跡が展開し、原始から人々の生活には適した場所であったことを物語っている。

本項では、稲の台古墳群の立地や概要については次項に譲ることとし、ここでは、周辺の遺跡を中心として、江戸崎町の遺跡を時代毎に概観してみたい。

第1図と第1表は、平成10・11年度に実施された埋蔵文化財包蔵地分布調査と、新規発見の遺跡を加えた、現在周知されている遺跡の位置とその詳細で、町内には、161ヶ所の遺跡が存在する。

縄文時代において、町の周辺地域には、土器形式の標識遺跡となった学史に残る遺跡が点在しているが、これらは、貝塚遺跡が多数を占め、町内においても高田地区の駒塚・椎塚、佐倉地区の南平・山中・小松川や、明神、村田、更に蒲ヶ山などの貝塚が知られる。稲の台古墳群においては、縄文早期末の炉穴が検出されており、周辺部の踏査でも該期の遺物が採取され、また、本遺跡の北方に位置する中佐倉貝塚ではこの時期の炉穴を調査しているなど、人々の痕跡を遺構として遡ることができる。

弥生時代では、昭和59年に実施された稲の台古墳群第1次調査において、7号墳の下から検出された後期の住居跡が本時期における遺構の初見となっている。これ以来、大日山古墳群、思川遺跡、秋平遺跡の発掘調査により遺構は確認されているが、これまでの発掘調査は、町の全域を網羅する形で実施されたものではなく、本遺跡周辺に偏在しているため断定はできないものの、数少ない調査事例と分布調査の成果を併せ考えると、町内では、北部の霞ヶ浦や小野川を臨む台地上に弥生時代の遺跡は展開するようである。

古墳時代のうち墓域は、全体で16古墳群、83基の古墳が確認されている。規模などについては、平成12年度刊行の『姫宮古墳群1・2号墳 水神峯古墳』の報告書に新規発見の山崎古墳群を除いた詳細が記載しているが、これらの古墳は、主に円墳で構成され、前方後円墳も全長53mを測る東前古墳群1号墳を最大とし11基を数える。古墳は、町全域に分布しているものの、概して、小野川やその他小河川の水系を臨む台地縁辺部に立地する傾向を示す。集落については、町全体に分布すると推定されるが、発掘調査が行われているのは、本遺跡周辺の台地上のみである。

律令期に至ると町内には、信太郡の郡衙が置かれており、小野川を遡った下君山の台地上が有力視されている。この台地上には、瓦が散布し、塔心礎が遺存する郡守と目される下君山廃寺が位置する。周辺の台地上からは、墨書土器を含む多量の遺物が表採され、それらの量から察すると、大規模集落の存在が示唆される。また、従来遺跡の埋蔵が確認されなかった台地麓部の微高地にも遺物の散布が認められ、遺跡の埋蔵が台地上にとどまることなく広がることを示している。

中世においては、10ヶ所で城館跡が確認される。詳細な調査が実施されていないため機能時期については、不明と言わざるをえないが、現在残る遺構からは中世末の築城技術が読みとれる。稲の台古墳群においても城館に伴う遺構が確認されており、南北朝期の史料に登場する佐倉橋は、北西1.5kmに位置する城の内遺跡と推定され、本遺跡との関連が指摘される。更に、本遺跡の東で台地下の古渡地区は、史料により頼朝河岸と呼ばれる河岸の比定地にあたり、中世の陶器片が表採されている。また、小野川対岸の古渡地区は、近世初頭において丹羽長重が陣屋を構えた地であり、この地域が交通の要衝であったことが窺われる。



榎の台古墳群全景 (1965年空撮)



第2図 遺跡の位置

左図 国土地理院作製2.5万分の1「江戸崎」

右図 明治14年測量迅速図「江戸崎村」を2.5万分の1に縮小

楯の台古墳群の概要

楯の台古墳群は、江戸崎町の北部、古渡地区と佐倉地区にまたがる台地上に位置する。この台地は、現在では土砂採取により大部分が消滅しているが、第2図や1965年に国土地理院が撮影した航空写真からは、大きな島状の独立した台地であることが判る。今日においては、小野川の流域は、干拓事業が進み肥沃な耕地となっているものの、旧状は霞ヶ浦に注ぎ込む河口付近にあたり、川幅も広くあたかも霞ヶ浦の内湾を呈していた。遺跡は、これらを眼下に納める台地上に存在する。

楯の台古墳群は、遺跡名が表すように周知の古墳群であるが、弥生時代から律令期へかけての集落跡、更には、中世の城館跡が一つの台地上に複合する遺跡である。このため、遺跡名を楯の台遺跡として扱っているものも見受けられるが、今回の調査では町遺跡台帳に従い古墳群の名称を用いた。

本台地における調査は今回で3次目を数える。第1次調査は、昭和59年に楯の台古墳群発掘調査会により、古墳4基と集落の調査が実施されている。以下、これらの概要を古墳・集落・城館に分けて概観したい。

古墳群は、合計8基から構成され、その規模については下表に記しているが、調査の結果6基が湮滅することとなった。古墳群の内訳は、前方後円墳3基（内帆立貝式古墳に近いもの1基）、帆立貝式古墳1基、円墳3基、方墳1基である。分布状況に関しては、第3図に示した通りで、概ね小野川の流域を視野に入れる台地縁辺部に位置し、遺跡の北1kmには、6世紀前半に比定される馬具が出土した水神峯古墳、西700mには、6基の古墳から構成される佐倉原古墳群が存在する。第1次調査において発掘されたのは、4～7号墳で、報告書においては、4号墳（円墳）が最も古く、次で7・5・6号墳の順となり、築造年代については、4号墳が主体部に粘土郭を用いているながらも、後期鬼高I類の住居跡を挟んで築造されているためこれに近接する時期とし、他は、掲載された出土遺物により6世紀以降の年代を与えている。なお、8号墳は、他の前方後円墳が主軸を東西方向にとるのに対して、その主軸は南北方向と異り、更に、位置的には城館に伴う空堀の堀底道を押さえる場所にあたることから、槽台とそれに連なる上塁の可能性が高いと判断される。しかし、古墳を利用していることも考えられるため、疑問符を付けて扱った。

集落は、縄文時代において、住居の検出には至っていないものの、早期（田戸下層・上層式、野島式、茅山式）、前期（諸磯式）、中期（阿玉台式、加曾利E式）の資料が得られている。住居が認められるのは、弥生時代後期における2軒であり、続いて古墳時代中期2軒と後期3軒である。また、弥生土器は、付加糸縄文を地文とする土器が大多数を占めるが、極少量の三角文を施文する南関東系の土器を報告している。

城館については、第1次調査の報告書中において、楯ノ台の地名について考察しているものの、中世の資料は得られておらず、今回の調査においてその一端が明らかとなっている。

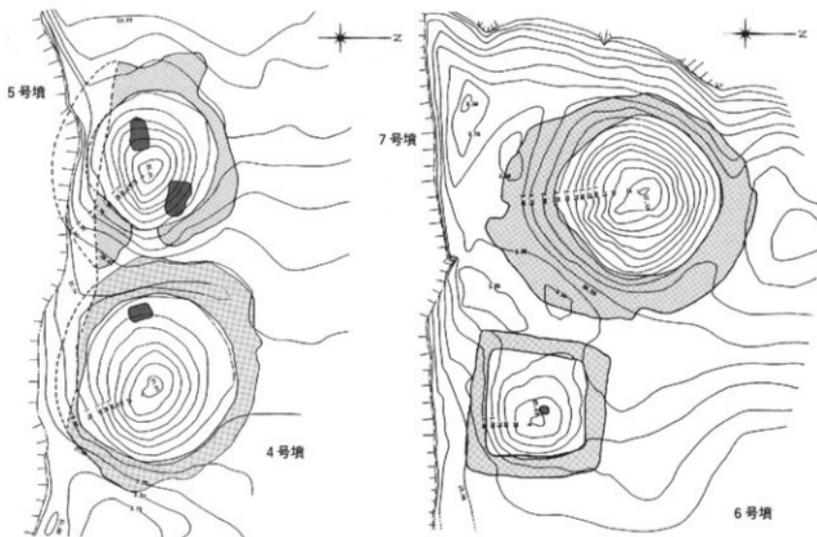
第2表 楯の台古墳群一覧表

番号	1号墳	2号墳	3号墳	4号墳	5号墳	6号墳	7号墳	8号墳
形態	前方後円墳	帆立貝式古墳	前方後円墳	円墳	円墳	方墳	円墳	前方後円墳?
規模	全長40 後円部幅23 後円部高3.3	全長19.0 後円部幅16.5 後円部高1.2	全長26.0 後円部幅18.0 高さ2.3	東西20.0 南北19.0 高さ2.3	東西17.0 南北16.0 高さ3.0	東西12.5 南北12.0 高さ1.7	東西19.5 南北20.0 高さ2.4	全長30 後円部幅19 後円部高3.0
備考	楯高神社北側	平成10年度実施の第2次調査により湮滅	平成10年度実施の第2次調査により湮滅	昭和59年度実施の第1次調査により湮滅	昭和59年度実施の第1次調査により湮滅	昭和59年度実施の第1次調査により湮滅	昭和59年度実施の第1次調査により湮滅	城館に伴う土器及び槽台の可能性が高い

(単位:m)



第3図 橢の台古墳群分布図 江戸絵可都市計画図2.5千分の1を5千分の1に縮小。白抜は澁減



第4図 4～7号墳墳丘測量図(1:600) 昭和61年刊行「橢の台古墳群」より加筆・転写



楯の台古墳群 遠景 (南より)



2号墳 調査前現況 (北西より)



3号墳 調査前現況 (北東より)



4号墳 調査状況 (北西より)



5号墳 調査状況 (北西より)



6号墳 調査状況 (東より)



7号墳 調査状況 (東より)



8号墳 現況 (南西より)

第3表 遺構一覧表

第2次調査(古墳)

遺構番号	形態	計測値	出土遺物
2号墳	帆立貝式	全長19.0m、後円部幅16.5m、高1.2m、主体部長辺2.4m、短辺0.8m、深さ0.5m、主軸方向：N-85°-W	土師器：高坏、須恵器：甍、甍
3号墳	前方後円	全長26.0m、後円部幅18.0m、高1.0m、主体部長辺2.5m、短辺1.1m、深さ0.54m、主軸方向：N-86°-E	土師器：高坏、須恵器：杯・甍・高坏・平甍、玉類：小玉・丸玉・管玉・薬玉

第2次調査(住居跡)

遺構番号	規模(m)	平面形態	主軸方向	土柱穴	貯蔵穴	その他	時期	出土遺物
1号住居跡	5.4×1.9	0.31					不明	3号墳に壊される。
2号住居跡	0.60×2.45	0.13					不明	3号墳に壊される。
3号住居跡	3.8×2.18	0.12	溝丸方形?			炉	弥生後	甍1。3号墳に壊される。

第2次調査(土坑)

遺構番号	規模	長軸×短軸	深さ(m)	平面形態	主軸方位	時期	遺構番号	規模	長軸×短軸	深さ(m)	平面形態	主軸方位	時期
1号土坑	1.27×0.70	0.20		不整形	N-47°-E	不明	3号土坑	2.07×1.4	0.17		楕円形	N-77°-W	不明
2号土坑	1.3×0.98	0.15		不整形	N-50°-E	不明							

第3次調査(住居跡)

遺構番号	規模(m)	平面形態	主軸方向	土柱穴	貯蔵穴	その他	時期	出土遺物	
1号住居跡	6.5×6.5	0.60	正方形	N-70°-W	4	有り	西電	6C初 土師器：坏5・高坏2・甍4、 土製品：土玉、石製品：紡錘車	
2号住居跡	3.9×3.3	0.30	溝丸方形	N-40°-W	なし	なし	北電	9C後 土師器：坏4・甍1、須恵器：坏1・甍1、 土製品：土玉、石製品：紡錘車 鉄製品：鎌・鋤先・刀子・葬・鎌・直刀・ 釘・鉾先・火打金	
3号住居跡	4.3×6.5	0.50	隅丸方形	N-0°	4	なし	炉	弥生後 甍1	
4号住居跡	6.0×6.0	0.55	正方形	N-50°-E	4	有り	西電	6C初 土師器：高坏1、須恵器：坏1	
5号住居跡	6.0×4.3	0.20	長方形	N-67°-E	不明	不明	炉	5C後 土師器：坏5・甍1、土製品：土玉	
6号住居跡	4.3×5.4	0.30	長方形	N-33°-W	4	なし	炉	古墳前 土師器：甍3・坏2	
7号住居跡	4.8×5.8	0.35	隅丸方形	N-30°-W	4	なし	炉	弥生後 甍1	
8号住居跡	5.7×5.9	0.40	正方形	N-63°-E	4	有り	炉	5C後 土師器：甍、石製品：紡錘車	
9号住居跡	6.6×6.6	0.40	正方形	N-55°-W	4	有り	西電	6C初 土師器：坏12・小甍2・甍5・高坏2、 土製品：土玉・管状土師、石製品：砥石	
10号住居跡	5.7×5.7	0.40	正方形	N-60°-E	4	有り	東電	5C末 土師器：坏5・高坏1・甍1・甍2、土玉	
11号住居跡	4.0×6.7	0.25	隅丸方形	N-30°-W	6	なし	炉	弥生後 甍1	
12号住居跡	4.3×4.6	0.50	正方形	N-10°-W	4	有り	北電	6C初 土師器：坏7・甍2・甍1、土製品：土玉	
13号住居跡	8.2×7.7	0.50	正方形	N-18°-W	4	有り	北電	6C初 土師器：坏3・高坏3・小甍2・甍4、 須恵器：坏1・高坏1、土製品：土玉	
14号住居跡	3.9×4.5	0.04	方形?		4		炉	古墳前期?	10号住居跡と重複し本跡が古い
15号住居跡	1.5×4.6	0.14	方形?		不明	不明		10号住居跡以前	10号住居跡と重複し本跡が古い
16号住居跡	3.45×1.5	0.15	溝丸方形?		不明	不明		弥生後後半以後	17号住居跡と重複し本跡が古い

第3次調査(土坑・炉穴)

遺構番号	規模	長軸×短軸	深さ(m)	平面形態	主軸方位	時期	遺構番号	規模	長軸×短軸	深さ(m)	平面形態	主軸方位	時期
1号土坑	1.2×0.6	0.17		長楕円形	N-7°-E	不明	9号土坑	直径1.1	0.38		円形	N-0°	不明
2号土坑	1.4×1.0	0.34		楕円形	N-13°-W	不明	10号土坑	1.1×1.0	0.22		円形	N-0°	不明
3号土坑	3号炉穴と同一						11号土坑	直径1.2	0.15		円形	N-0°	縄文
4号土坑	直径0.7	0.36		円形	N-0°	6C初	1号炉穴	1.7×1.0	0.1		楕円形	N-55°-W	縄文早末
5号土坑	直径1.3	0.3		円形	N-0°	不明	2号炉穴	0.9×0.7			楕円形	N-15°-W	縄文早末
6号土坑	1.1×0.9	0.32		楕円形	N-23°-W	不明	3号炉穴	1.3×1.1	0.25		楕円形	N-26°-W	縄文早末
7号土坑	直径0.7	0.24		円形	N-0°	不明	4号炉穴	直径0.6	0.3		円形	N-0°	縄文早末
8号土坑	直径0.7	0.16		円形	N-0°	不明	5号炉穴	不明					縄文早末

Ⅳ 検出された遺構と遺物

遺構と遺物の概要

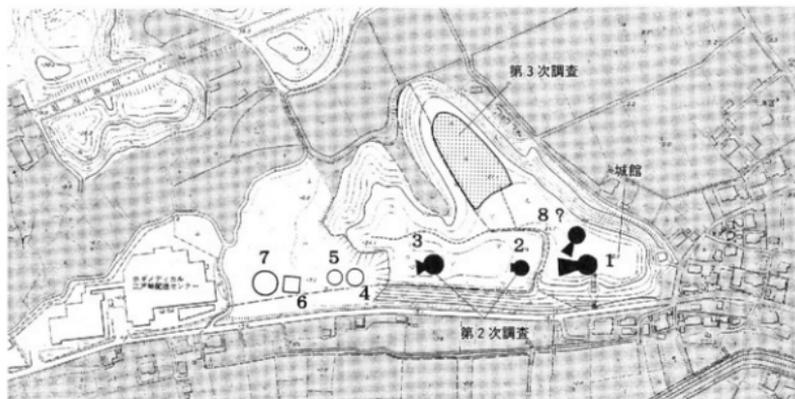
調査は下図に示した通り、東西に広がりを持つ台地の東部分を対象として実施され、小野川を臨む南部に古代の墓城、北の舌状に張り出す台地上に生活域、東端に中世の城館が確認されている。

第2次調査においては、2・3号の帆立貝式と前方後円の2基の古墳を主な対象としたが、弥生時代と時期不明の住居跡を3軒検出し、集落の一部を調査している。本格的な集落の調査は、古墳の北側において実施された第3次調査で、弥生時代後期、古墳時代、平安時代、時期不明の住居跡16軒が検出された。

出土遺物においては、縄文早期末の条痕文系土器が数量的には多数を占め、次いで中期前半の阿玉台式の資料が古く、その後、弥生時代後期以降住居に伴う遺物が見られる。これらについては、代表的な器形を図示し、器種構成を示すため集合写真で提示し、個体数を左表中に記録した。器形についての分類は、本遺跡の北に位置する大規模集落が調査された秋平・池平遺跡の報告書中の分類を踏襲している。

集落内において出土した須恵器は、坏身・蓋・高坏・壺などで、TK208あるいはTK23と、TK47の製品が確認され、各遺構の時期を判断するための基準とした。また、各遺構からは、球状や管状の土鍾が出土しており、漁撈活動が活発であったことが推測され、霞ヶ浦へ注ぎ込む小野川の河口付近に位置する遺跡の立地を如実に示している。更に、平安時代、9世紀後半に位置付けられる2号住居跡からは、鋤先・鎌などの農具に混じり釘・斧・刀子・火打金・鎌・直刀・鉸具？などの鉄製品が出土している。特に鎌・直刀・鉸具？などは、古墳における副葬品の可能性が考えられ、周辺地域には古墳が数多く分布することから、これら周辺の古墳からもたらされたものかもしれない。

一方、古墳における出土遺物は、周溝内によるものが大多数を占め、特に3号墳からは湖西産の須恵器（高坏・平瓶）が出土している。主体部は、いずれも箱式石棺と考えられる形態で、2号墳は、3号墳と比べ遺存状態は良いものの須恵器片（蓋）1点が出土しているに過ぎない。これに対し3号墳の主体部からは、琥珀及びガラス・水晶などを素材とした薬玉・管玉・丸玉・小玉の玉類が出土している。



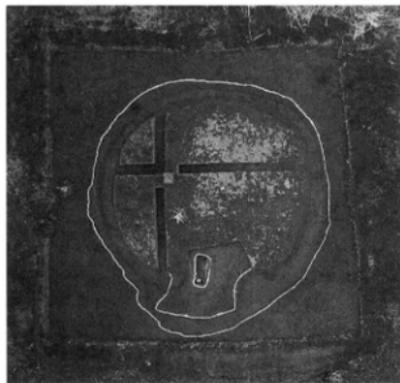
第5図 調査区設定図 (1:5,000)



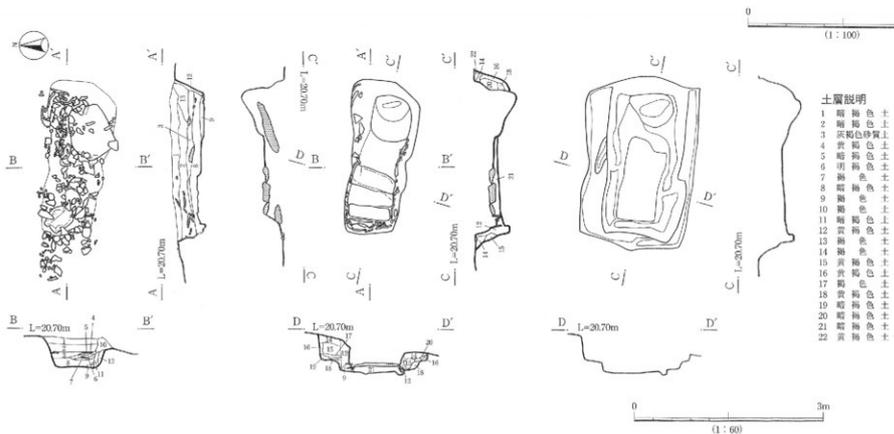
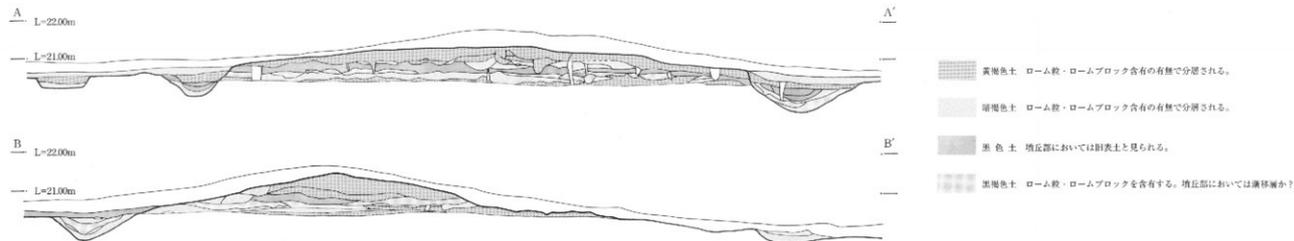
第6図 2号墳填丘測量図(1:200)



2・3号墳全景(北東より)

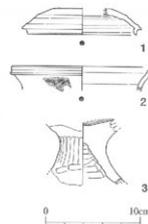


2号墳全景(空撮)



土質説明

- 1 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック0.1~3cm含む。しまりなし。粘性なし。
- 2 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック含む。しまりなし。粘性なし。
- 3 黄褐色砂質土 ロームブロック0.1~2cm少量含む。しまりなし。粘性なし。
- 4 黄褐色土 ロームブロック0.1~2cm多量含む。しまりなし。粘性なし。
- 5 暗褐色土 しまりなし。粘性なし。
- 6 明褐色土 ロームブロック0.1~3cm含む。しまりなし。粘性なし。
- 7 黒色土 しまりなし。粘性なし。
- 8 黄褐色土 ロームブロック0.1~2cm少量含む。しまりなし。粘性なし。
- 9 黒色土 しまりなし。粘性なし。
- 10 黒色土 塑性粘土層含む。しまりなし。粘性なし。
- 11 黒色土 砂質粘土層、泥層をかきしまりなし。粘性なし。
- 12 黄褐色土 粘土少量含む。しまりなし。粘性なし。
- 13 黒色土 ローム粒少量含む。しまりなし。ボソボソ感。粘性なし。
- 14 黄褐色土 粘性あり。しまりなし。
- 15 黄褐色土 石灰少量含む。ボソボソ感。粘性あり。しまりなし。
- 16 黄褐色土 粘土少量混入。粘性あり。しまりなし。
- 17 黄褐色土 石灰片多量含む。粘性あり。しまりなし。
- 18 黄褐色土 しまりなし。粘性あり。
- 19 黄褐色土 ローム粒少量含む。しまりなし。粘性あり。
- 20 黄褐色土 ロームブロック少量少量含む。しまりなし。粘性あり。
- 21 黄褐色土 しまりなし。粘性あり。
- 22 黄褐色土 しまりなし。粘性あり。



※縮尺は1：4、●は根拠層を示す。



2号墳出土遺物



2号墳全景 (西より)



同 後円部周溝構築状況 (北より)



同 主体部検出状況 (北より)



同 主体部構築状況 (西より)



同 主体部掘り方 (西より)

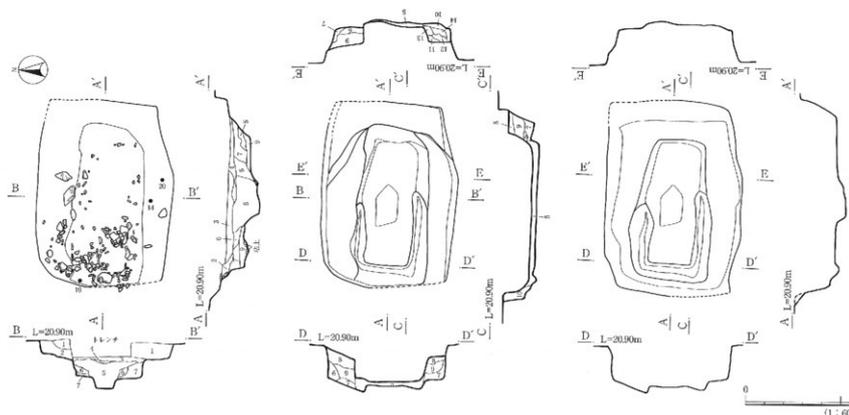
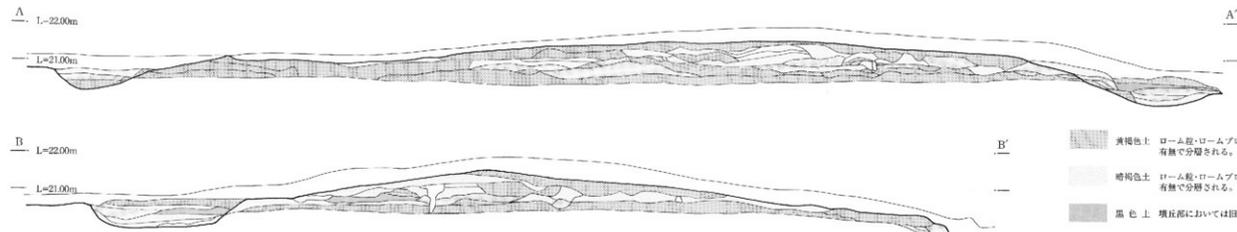
古墳

2号墳 帆立貝式古墳で、遺跡の立地する台地のやや東部分に位置し、南に小野川を臨む縁辺部に立地する。地勢はほぼ平坦で、基底面の標高は20m前後を測り、現況は東西20m、南北13.5m、高さ0.80mである。1号墳とは約30mの距離を隔てて西に位置し、現況は籐竹・低木が生い茂る荒地で、墳丘の上部は削平を受けていると判断されるが、平面的には、築造当時の原形を保っている。平面形態は、前方部が狭く北側の側面は括れ部からやや開き、後円部は部分的に凹凸があるものの正円を呈する。調査の結果、墳丘の規模は、全長19.0mで、周溝を含み22.5m、前方部長4.0m、幅6.5m、後円部幅16.5m、墳丘の残存高は、前方部0.40m、後円部1.2mを計測する。主軸方向は、N-85°-Wである。墳丘の構築状況を表したのが第7図で、含有物及びその量により分層された黄褐色土・暗褐色土・黒色土・黒褐色土をスクリントンで図示した。このうちの黒色土が旧表土と推定され、その上に版築状の黄褐色土が確認される。周溝は全周しブリッチは認められない。幅は多少の変化はあるものの括れ部が最大となる他は1.7~2.7m、深さ0.4~1.0mを計測する。括れ部は幅3.5m、深さ0.5mである。主体部は、括れ部に構築され、雲母片岩を組み合わせた箱式石棺を土坑中に埋設したものである。石棺の主軸はN-75°-Wを示し、墳丘の主軸とは微妙にずれる。石棺は、雲母片岩を用いて構築され、調査時においては蓋石1枚が棺内に崩落し、側石は抜き取られた状態で、底石3枚が平うじて遺存していた。底石は検出されているものと同様であるとすれば7枚程と推測される。棺の推定計測値は、長辺2.4m、短辺0.8m、深さ0.5mである。なお、棺と土坑の間には黄褐色土を主体とした裏込が行われている。土坑掘り方は長辺2.7m、短辺1.7m、深さ0.65mである。遺物は、図版番号1の須恵器の蓋が主体部から出土し、7世紀の前半に比定されることから、この時期に築造されたものと判断される。2・3については、6世紀代の遺物であるが、後円部東の周溝内出土のため提示した。

3号墳 前方後円墳で、2号墳と同様の地形上に立地し、2号墳とは約80mの距離を隔てて西に位置する。現況は籐竹・低木が生い茂る荒地であり、墳丘の上部は大きく削平を受けていると判断されるが、平面的には、良好な保存状態を示す。現況規模は東西16m、南北10m、高さ0.50mである。平面形態は、括れ部がしっかりと構築され、前方部が短くハの字状に開き、後円部は歪んでいるもののほぼ正円を呈する。調査の結果、墳丘の規模は、全長26.0mで、周溝を含み30.0m、前方部長7.5m、最大幅10.0m、後円部幅18.0m、墳丘の残存高は、前方部0.35m、後円部1.0mを計測する。主軸方向は、N-86°-Eである。第9図は、墳丘の構築状況を把握するため墳丘に対し、東西南北を基準に設定した土層観察用ベルトの結果を、土質毎にまとめスクリントンで表したものである。このうちの黒色土及び黒褐色土が旧表土と推定され、その上に版築状の黄褐色土が確認される。周溝は、前方部南西角がブリッチとなり、南部分については、台地縁辺部側であることに起因すると見られ、明瞭な掘り込みは確認されていない。幅は括れ部が最大となり0.58m、最狭は前方部先端で0.18mである。深さは0.40~0.70mを計測する。主体部は、前方部の後円部側に偏して構築され、雲母片岩の散布が確認されることにより、箱式石棺を土坑中に埋設したと推測される。掘り方の主軸はN-82°-Wを示し、墳丘とは微妙にずれる。石棺の石材はすべて抜き取られており、土層断面及び掘り方の形状から棺の推定計測値は、長辺2.5m、短辺1.1m、深さ0.54mである。棺と土坑の間には黄褐色土・暗褐色土・褐色土を主体とした裏込が行われている。掘り方の計測値は、長辺3.0m、短辺1.82m、深さ0.64mである。遺物は、図版番号13~20の玉が主体部から、また、8~12の須恵器が北側括れ部の周溝内から出土し、湖西産の須恵器より7世紀初頭の年代が与えられ、検出された主体部の構築時期と判断される。一方、後円部の周溝内と括れ部より1~6の6世紀前半の遺物が出土している。

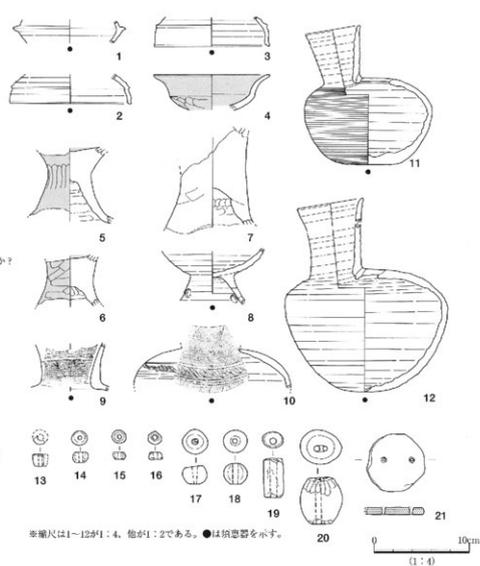


第8图 3号墳填丘測量図 (1:200)



土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックΦ1-2cm少量含む、粘性なし。しまりあり。
- 2 黒褐色土 ローム粒多量に含む、粘性なし。しまりあり。
- 3 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックΦ1-3cm少量含む。しまり弱。粘性なし。しまりあり。
- 4 褐色土 粒子粗くボソボソ感。ロームブロックΦ1-4cm少量含む。粘性なし。しまりなし。
- 5 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックΦ1-3cm少量含む。微しまりあり。粘性なし。しまりなし。
- 6 暗褐色土 ローム粒少量含む。粘性なし。しまりなし。
- 7 暗褐色土 ロームブロックΦ1-3cm少量含む。粘性なし。しまりなし。
- 8 暗褐色土 ロームブロックΦ2-10cm多量含む。しまりなし。
- 9 褐色土 ソフトローム? 明るい。
- 10 褐色土 ソフトローム? 明るい。
- 11 暗褐色土 ロームブロックΦ5-8cm多量含む。
- 12 褐色土 ローム粒少量含む。
- 13 暗褐色土 ローム粒少量含む。明るい。
- 14 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロックΦ2-3cm少量含む。



※縮尺は1-12が1:4、他が1:2である。●は須恵器を示す。



3号墳全景(空撮)

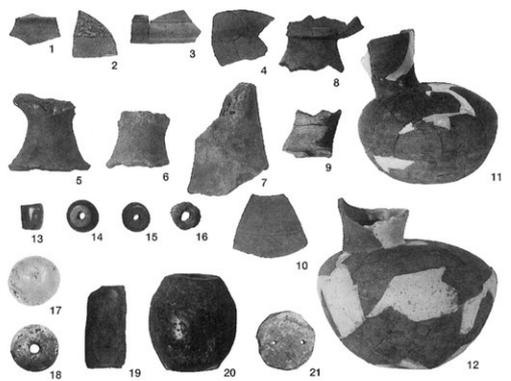
同 全景(西より)

同 後円部周溝構築状況(西より)

同 主体部構築状況(西より)

同 主体部掘り方(西より)

第9図 3号墳



3号墳出土遺物

集落

第2次調査において、3号墳築造時に壊された弥生時代後期と、時期不明の住居が3軒検出されているが、いずれもその構造を把握できるものではなく、集落の本格的な調査は、古墳群の北側において実施された第3次調査においてである。3次調査において確認された16軒の住居のうち、明確に時期を判断できるものは、弥生時代後期が3軒（3・7・11号）、古墳時代前期が1軒（6号）、5世紀後半が2軒（5・8号）、6世紀初頭が6軒（1・4・9・10・12・13号）、9世紀後半が1軒（2号）で、6世紀初頭に盛期を持つことが明らかとなっている。資料の提示にあたっては、上記の区分に従って古いものより順に左頁に遺構、右頁にその出土遺物を図示した。

各時期における住居の形態を概観すると、弥生時代には、平面形が概ね長楕円形で、中央部に炉を伴っている。これらの住居跡は、付加条1種を施文した土器の出土及びその器形から後期と判断される。

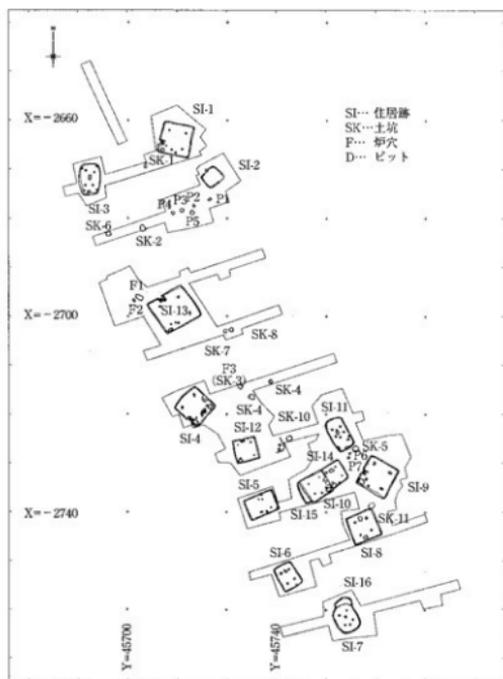
続く古墳時代前期の所産である6号住居跡は、隅角に丸味を持った長方形で、北側に炉が付設され、5世紀後半には平面形態は方形となり、炉の付設位置は主柱穴間に挟まれた壁際に偏在する。

竈への移行が確認されるのは、6世紀初頭においてであり、平面形態はほぼ正方形で、硬化面の状況及び小ピットの検出により出入口が想定される。竈の位置については、出入口の左右に中軸線よりはずれた

片側に偏って付設されているものと、出入口の対面に位置するものとに分類される。貯蔵穴についても前者の場合竈が偏在した結果、面積が小さくなった住居内角に付設され、後者の場合は、竈の対面の住居隅に位置するなど、構造上に企画性が読み取れる。

これらの図示にあたって、出入口が想定されるものについては、出入口を正面において掲載し、その他については、中軸線を基準に用いた。

また、終焉を迎えるのは9世紀後半の住居で、2号住居の1軒のみの検出となり、平面形態は、ほぼ正方形であるが小型化する。なお、この住居の竈付設壁の外側には張り出し状に薄い黒色土の堆積が捉えられ、棚状施設の存在が示唆される。



第10図 第3次調査(集落)全体図(1:1,000)



3号土坑（炉穴）全景（南より）



3号住居跡全景（南より）

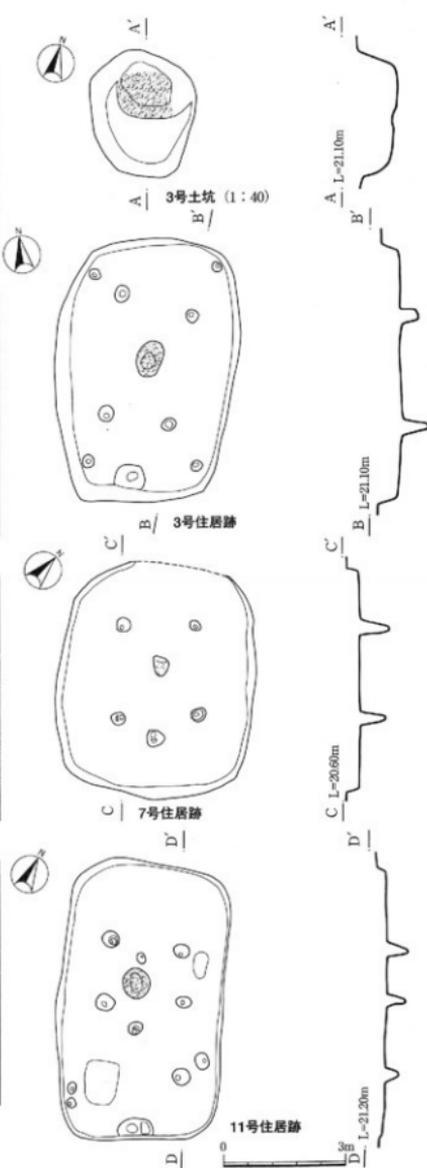


7号住居跡全景（南より）



11号住居跡全景（南より）

※スタクリントン焼土。縮尺は1：130。



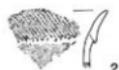
第11図 縄文時代早期・弥生時代後期



3号土坑(炉穴)



1



2



3

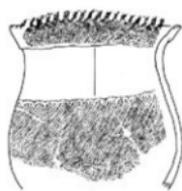


2



3

3号住居跡



4



4

7号住居跡



5



6



5



6

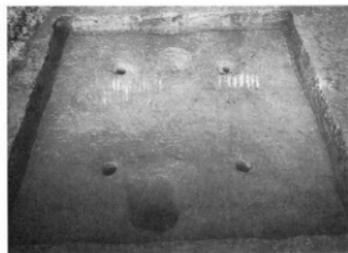
11号住居跡

0 10cm

※縮尺は1:4



6号住居跡全景（南より）



8号住居跡全景（南より）

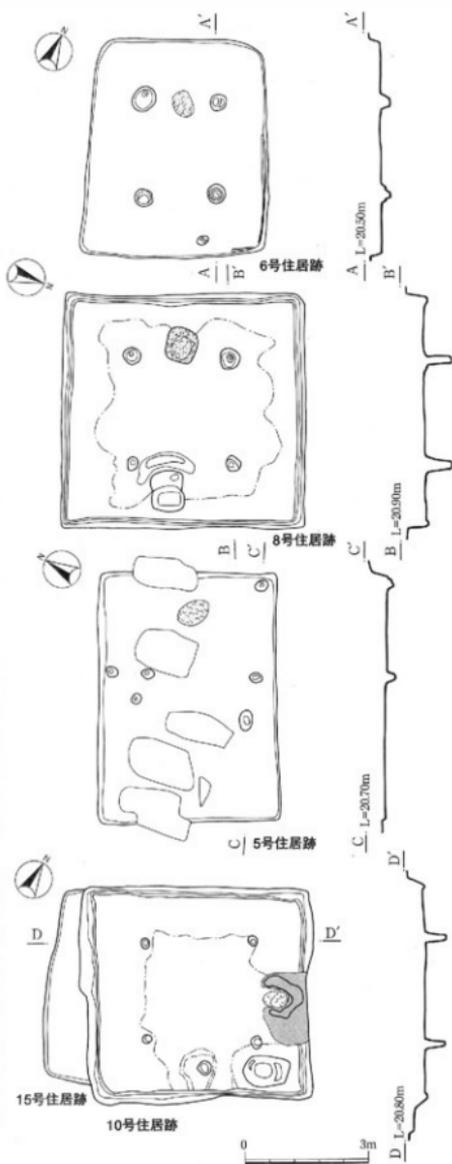


5号住居跡全景（西より）

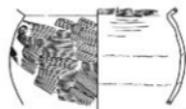


10号住居跡全景（西より）

※スクリーンは焼土及びカマド部分。縮尺は1：120。



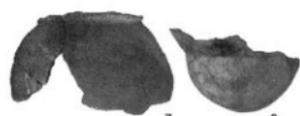
第12図 古墳時代前期・5世紀後半・6世紀初頭



7(1:6)



8



7

8

6号住居跡



9



9

8号住居跡

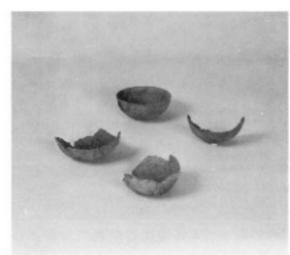


10



11

5号住居跡



5号住居跡出土遺物



12



16



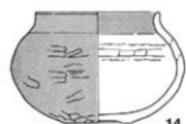
13



17



10号住居跡出土遺物



14



18(1:6)



15



16

17

10号住居跡



●は頸部、縮尺は()を除き1:4、スクリーンは赤彩。



1号住居跡全景（東より）



4号住居跡全景（北東より）

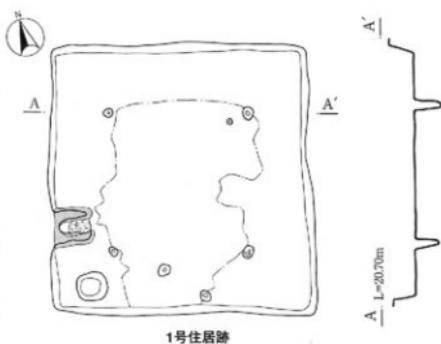


9号住居跡全景（南より）

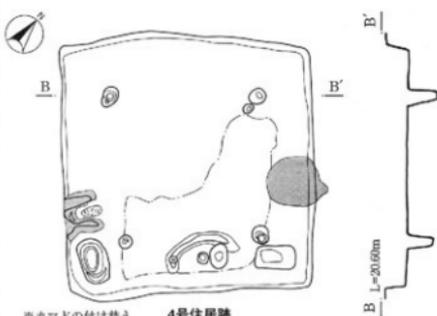


同 遺物出土状況（西より）

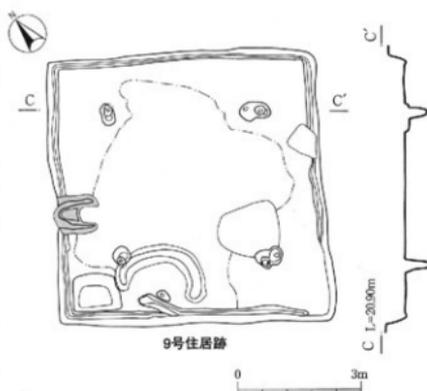
※スクリーンは壁上及びカマド部分。縮尺は1:120。



1号住居跡



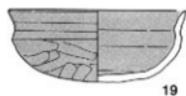
※カマドの付け替え 4号住居跡



9号住居跡

0 3m

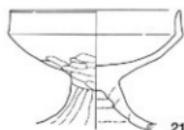
第13図 6世紀初頭



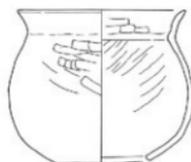
19



20



21



22(1:6)

1号住居跡



1号住居跡出土遺物



23



24

4号住居跡



23

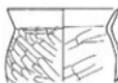
24



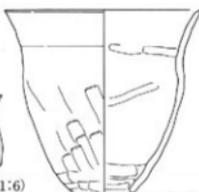
25



26



30(1:6)



31(1:6)



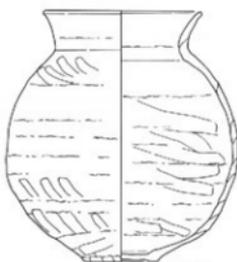
9号住居跡出土遺物



27



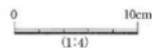
28



32(1:6)



33



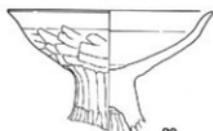
(1:4)



29



30



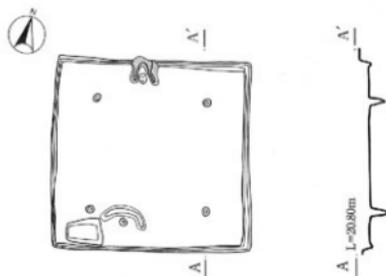
29

9号住居跡

●は須恵器、縮尺は()を除き1:4、スクリーンは赤銅。



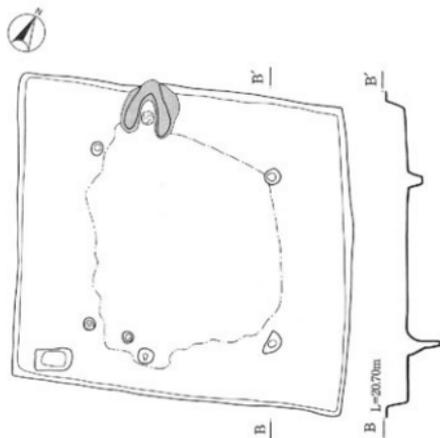
12号住居跡全景（南から）



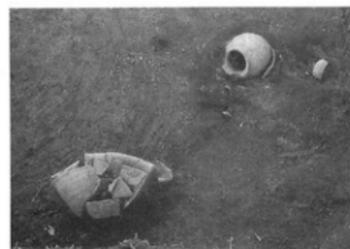
12号住居跡



13号住居跡全景（南から）



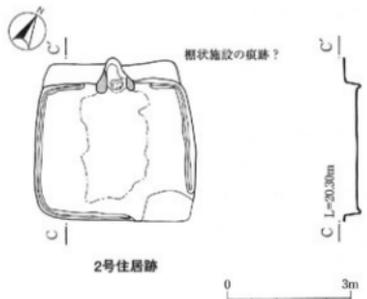
13号住居跡



同 遺物出土近景（西から）



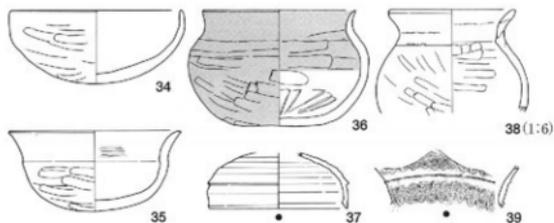
2号住居跡全景（南から）



2号住居跡

※スクリーンは黄土及びカマド部分。縮尺は1:120。

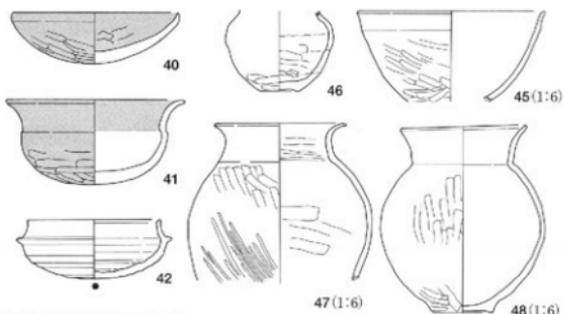
第14図 6世紀初頭・9世紀後半



12号住居跡



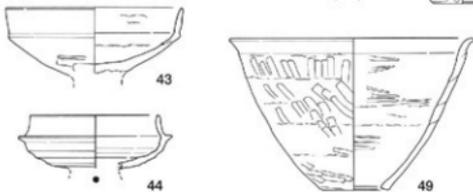
12号住居跡出土遺物



13号住居跡



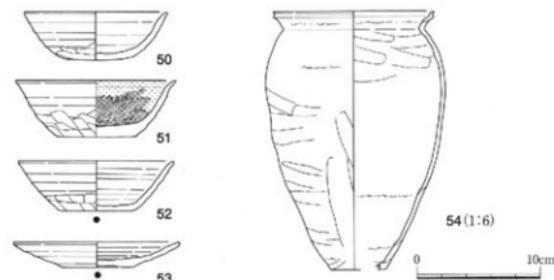
13号住居跡出土遺物



13号住居跡



42



2号住居跡



2号住居跡出土遺物

●は須恵器、縮尺は()を除き1:4、スクリーン451が黒色処理
他は赤彩。



第15図 2号住居跡出土鉄製品

第4表 出土遺物観察表
2号墳

番号	器形	口径 底径 器高(cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	(11.4) (2.8)	天井部に回転彫りを施す。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色	
2	須恵器 蓋	(14.8) (2.5)	口縁部に波状文を施す。	白色粒を含む	良好	暗灰色	
3	土師器 高坏	(6.9)	胴部片。体部外面は彫削り、坏部内面に施磨きを施す。	石英・白色粒を含む	良好	明褐色	

3号墳

番号	器形	口径 底径 器高(cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(2.5)	体部片。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	灰色	
2	須恵器 蓋	(12.8) (3.1)	口縁部片。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色	
3	須恵器 蓋	(12.1) (3.2)	天井部に回転彫りを施す。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色	
4	土師器 高坏	(12.2) (3.7)	坏部片。体部外面は彫削り、口縁部は横溝でを施す。内外面赤彩。	石英・白色粒を含む	良好	褐色	
5	土師器 高坏	(7.9)	胴部片。体部外面は彫削り、坏部内面に施磨きを施す。外面赤彩。	石英・白色粒を含む	やや甘い	暗赤褐色	
6	土師器 高坏	(5.6)	胴部片。体部外面は彫削り、坏部内面に施磨きを施す。外面赤彩。	長石・白色粒を含む	良好	暗赤褐色	
7	土師器 高坏	(10.5)	胴部片。体部外面は彫削りの後、横溝を施す。	長石・白色粒を含む 砂っぽい	甘い	明褐色	
8	須恵器 高坏	(5.2)	胴部に孔が3ヶ所確認される。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	灰色	
9	須恵器 平皿?	(4.8)	胴部片。外面に波状文が施される。	白色粒を含む	良好	暗灰色	
10	須恵器 板瓦	(4.1)	体部上半部片。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色	
11	須恵器 平板	(5.8) 14.8	体部全体にカキ目が施される。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色	
12	須恵器 平板	(7.0) (20.5)	体部下端に彫削りが施される。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	灰白色	
13	小玉	ガラス製。直径(0.8)・厚さ0.6・重さ0.19g					
14	小玉	ガラス製。直径0.8・厚さ0.6・重さ0.54g					
15	小玉	ガラス製。直径0.7・厚さ0.4・重さ0.38g					
16	小玉	石製。直径0.7・厚さ0.4・重さ0.49g					
17	丸玉	水晶製。直径1.3・厚さ1.0・重さ2.26g					
18	丸玉	石製と見られるが、ガラス製の可能性も有する。直径1.2・厚さ1.1・重さ1.88g					
19	管玉	琥珀製。直径1.1・長さ2.1・重さ1.24g					
20	管玉	琥珀製。直径2.2・長さ2.4・重さ6.65g					
21	有孔円板	滑石製。直径3.1・厚さ0.4・重さ7.71g					

※()は測定値、< >は残存値

住居跡

番号	器形	口径 底径 器内(cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	31.6 (14.5)	体部中程に筋目施した隆帯をめぐらし、口唇部にも筋目を施す。	石英・白色粒・ 繊維を含む	良好	褐色	3号土坑
2	弥生土器 壺	(4.5)	口縁部は付加糸1種編文を施した後、棒状工具により削製する。	石英・白色粒を 多量に含む	良好	暗褐色	3号住居跡
3	弥生土器 壺	9.4 (3.2)	底部は平底で、木炭灰が確認される。体部は付加糸1種編文を施文する。	石英・白色粒を 含む	良好	褐色	3号住居跡
4	弥生土器 壺	13.7 (13.1)	体部外面及び口縁部は、付加糸1種、内面は兼杖工具による襷を施す。口唇部は縄文原体の押捺による筋目を加える。	石英・白色粒を 含む	良好	暗褐色	7号住居跡
5	弥生土器 壺	14.4 (8.8)	口縁部及び体部中程に付加糸1種編文、内面は兼杖工具による襷を施す。	石英・白色粒を 含む	良好	暗褐色	11号住居跡
6	弥生土器 壺	7.2 (11.0)	底部は平底で、内面は焼削りの後襷を施す。外面に木炭灰が確認される。	石英・白色粒を 含む	良好	暗褐色	11号住居跡
7	土師器 壺	(11.0)	胴部外面及び口縁部内面に研目を施す。	石英・白色粒を 含む	良好	明褐色	6号住居跡
8	土師器 壺	2.4 (7.0)	体部外面は焼削り、内面は兼襷で施す。	白色粒を含む	良好	明褐色	6号住居跡
9	土師器 壺	9.0 10.7	体部外面は焼削りの後兼襷を施す。口縁部は横襷で、胴部は焼削りを施す。	石英・白色粒を 含む	良好	明褐色	8号住居跡
10	土師器 杯 B4	13.0 5.8	体部外面は焼削り、内面は兼襷、口縁部は横襷で施す。	石英・白色粒を 含む	良好	赤褐色	5号住居跡
11	土師器 杯 B4	13.0 5.8	体部外面は焼削り、内面は兼襷で、口縁部は横襷で施す。 底部に帯が付着する。	石英・白色粒を 少量含む	良好	褐色	5号住居跡
12	土師器 杯 B4	17.3 4.9	体部外面は焼削り、口縁部は横襷で施す。	石英を含む	良好	赤褐色	10号住居跡
13	土師器 壺	10.8 4.0 7.5	体部外面は焼削り、口縁部は横襷で施す。底部は平底状で木炭灰が確認される。	石英・白色粒を 含む	良好	褐色	10号住居跡
14	土師器 杯 E3	(10.0) 5.4 9.0	体部外面は焼削りの後襷で、内面は兼襷で、口縁部は横襷で施す。 内外面赤彩。	石英・白色粒・ 砂粒を含む 砂っぽい	良好	赤褐色	10号住居跡
15	土師器 高杯 B2	(10.0)	体部外面は焼削り後襷で、杯部内面は放射状の兼襷、口縁部は横襷で施す。	石英・白色粒・ 黒色粒を含む	良好	褐色	10号住居跡
16	須恵器 壺	(12.8) (3.7)	尖斗は同形焼削りを施す。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色	10号住居跡
17	須恵器 高杯	14.4 8.7 11.0	胴部外面にカキ目、杯部内底面に同心円の磨り出し痕が確認される。 TK23の古い段階か？	白色微粒比較的 多く鉄分も少量 含む	良好	灰～緑灰色	10号住居跡
18	土師器 壺	17.8 6.3 28.5	胴部ノミは焼削り、口縁部及び胴部上半は兼襷を施す。内面は兼襷で施す。	石英・白色粒を 多量に含む	良好	褐色	10号住居跡
19	土師器 杯 A5	11.4 5.7	体部外面は焼削り、口縁部は横襷で施す。 内外面赤彩。	石英・白色粒を 含む	良好	暗赤褐色	1号住居跡
20	土師器 杯	12.0 8.4	体部外面は焼削り、内面は兼襷で施す。	石英・白色粒を 含む	やや甘い	明褐色	1号住居跡
21	土師器 高杯	13.8 (9.7)	体部外面は焼削り、口縁部は横襷で施す。	石英・白色粒を 含む	やや甘い	暗赤褐色	1号住居跡
22	土師器 壺	20.4 11.3 18.5	胴部外面は焼削り、内面は兼襷で施す。底部は定型的に穿孔している。	石英・白色粒を 含む 砂っぽい	良好	明褐色	1号住居跡
23	須恵器 壺	12.0 (4.1)	尖斗部に同形焼削りを施す。 TK47。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	灰色	4号住居跡
24	土師器 高杯	15.6 10.4 10.0	体部外面に焼削りを施す。	石英・白色粒を 含む 砂っぽい	良好	褐色	4号住居跡
25	土師器 杯 A2	13.8 5.2	体部外面は焼削り、内面は放射状の兼襷、口縁部は横襷で施す。 内外面赤彩。	石英・白色粒を 含む	良好	暗赤褐色	9号住居跡

※ () は復元値、() は残存値

番号	器形	口径 底径 器高(cm)	成・整形の特徵	胎土	焼成	色調	備考
26	土師器 環 B1	12.6 5.1	外部外面は彫削り、内面は撫で、口縁部は横溝 を施す。	石英・白色粒・ 砂粒を含む	良好	褐色	9号住居跡
27	土師器 環 C	13.9 5.0 5.1	外部外面は彫削り、内面は撫でを施す。	石英・白色粒を 含む	良好	暗赤褐色	9号住居跡
28	土師器 D3	12.6 9.9	外部外面は彫削り、内面は撫で、口縁部は横 溝を施す。	石英・白色粒を 含む	良好	明褐色	9号住居跡
29	土師器 高環	16.6 (9.9)	外部外面は彫削り、口縁部は横溝を施す。	石英・白色粒を 含む	やや良い	褐色	9号住居跡
30	土師器 葉 I1	(13.6) (9.0)	胴部外面は彫削り、内面は撫で、口縁部は横 溝を施す。	石英・白色粒を 含む	良好	暗褐色	9号住居跡
31	土師器 瓶 A1	13.9 7.1 22.2	単孔の瓶である。外部外面は彫削り、内面は撫 で、口縁部は横溝を施す。	石英・白色粒を 含む	良好	明褐色	9号住居跡
32	土師器 葉	19.2 9.0 32.5	胴部外面は彫削り、内面は撫で、口縁部は横 溝を施す。	石英・白色粒を 多量に含む	良好	暗灰色	9号住居跡
33	土師器 手取土器	3.9 (2.3)	腰部下半片である。	石英・白色粒を 含む	良好	褐色	9号住居跡
34	土師器 環 B3	(14.0) 6.0	外部外面は彫削りを施す。	石英・白色粒・ 砂粒を多量に含 む	やや良い	暗赤褐色	12号住居跡
35	土師器 環 A5	14.0 6.5	外部外面は彫削り、口縁部外面は横溝で、内面 は彫削りを施す。	石英・白色粒を 含む	良好	明褐色	12号住居跡
36	土師器 環 D3	(12.4) 6.2 9.4	外部外面は彫削り後撫で、内面は撫で、口縁 部は横溝を施す。 外面彫削り。	石英・白色粒・ 砂粒を含む	良好	暗赤褐色	12号住居跡
37	須恵器 壺	(11.2) (4.5)	天井部は同軸彫削りを施す。	大粒の長石・白 色粒・黒色粒を 含む	良好	灰色	12号住居跡
38	土師器 壺 D1	(15.4) (12.5)	胴部外面は彫削り、内面は撫で、口縁部は横 溝を施す。	大粒の石英・白 色粒・砂粒を多 量に含む。	良好	褐色	12号住居跡
39	須恵器 壺	(4.3)	頸部片。外面に波状文を施す。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色	12号住居跡
40	土師器 環 A	(4.1)	外部外面は彫削り、内面は彫り後撫で、口縁部 は横溝を施す。 内外赤彩。	石英・白色粒を 含む	良好	明褐色	13号住居跡
41	土師器 環 B4	14.6 6.8	外部外面は彫削り、口縁部は横溝を施す。 内外赤彩。	石英・白色粒を 含む	良好	赤褐色	13号住居跡
42	須恵器 環	10.7 4.8	外部外面は彫削りを施す。 TK47。	白色粒を含む	良好	暗灰色	13号住居跡
43	土師器 高環	14.4 (5.4)	外部外面は彫削り後撫で、口縁部は横溝を施す。	石英・白色粒を 少量含む	良好	暗赤褐色	13号住居跡
44	土師器 高環	(10.4) (4.7)	底部に脚部の痕跡を残す。 TK47。	石英・白色粒を 含む	良好	灰色	13号住居跡
45	土師器 鉢?	22.6 9.8 (11.0)	外部外面は彫削り、内面は撫で、口縁部は横溝 を施す。	石英・白色粒を 含む	良好	褐色	13号住居跡
46	土師器 小型壺	4.4 9.6	胴部下縁外面は彫削り、内面は撫でを施す。	石英・白色粒を 含む	良好	褐色	13号住居跡
47	土師器 壺 D4	15.8 (18.9)	胴部上半は彫削り、下半は彫削り、内面は撫 で、口縁部は横溝を施す。	大粒の長石・白 色粒・砂粒を多 量に含む	良好	褐色	13号住居跡
48	土師器 葉 B2	15.5 7.3 22.4	胴部外面は彫削り、口縁部は横溝を施す。	石英・白色粒を 含む	良好	褐色	13号住居跡
49	土師器 瓶 A2	29.6 8.3 18.2	単孔の瓶である。外部外面は彫削り、内面は撫 で、口縁部は横溝を施す。	石英・白色粒・ 黒色粒を含む	良好	明褐色	13号住居跡
50	土師器 環	11.6 5.3 3.9	底部及び腰部下端は手持ち彫削りを施す。	石英・白色粒・ 黒色粒を含む	良好	明褐色	2号住居跡

※ () は復元値、< > は残存値

番号	器形	口径 底径 器高(cm)	成・形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
51	土師器 坏	13.0 6.4 4.5	底部及び体部下端に施磨り、内面は施磨きを施す。 内面黒色処理。	石英・白色粒を含む	良好	褐色色	2号住居跡
52	須恵器 坏	12.6 6.1 4.0	底部及び体部下端に、手持ち施磨りを施す。	石英・白色粒を含む	未還元	褐色色	2号住居跡
53	須恵器 皿	13.4 5.8 2.0	底部及び体部下端は、手持ち施磨りを施す。	石英・白色粒を多量に含む	不良	褐色色	2号住居跡
54	須恵器 釜	19.6 (6.3) 31.2	胴部外面は施磨り、内面は施磨りで、口縁部は横強を施す。	石英・白色粒・砂利多量に含む	良好	明褐色	2号住居跡
55	鉄製品 鏝	全長 (11.0) ・幅6.2 ・厚さ0.5 ・重さ235g					2号住居跡
56	鉄製品 鎌・釘	鎌：全長 (12.9) ・幅3.6 ・厚さ0.5g、釘：全長 (12.6) ・幅0.9 ・厚さ0.9 ・総重量135g					2号住居跡
57	鉄製品 鎌	全長 (9.9) ・幅2.9 ・厚さ0.3 ・重さ30g 右鎌である。					2号住居跡
58	鉄製品 斧・釘・刀子	全長 (11.3) ・幅3.3 ・厚さ0.4 ・総重量320g 鉄斧・鉄釘・刀子が挿着している。					2号住居跡
59	鉄製品 釘	全長 (11.2) ・幅0.9 ・厚さ0.9 ・重さ38g					2号住居跡
60	鉄製品 火打金	全長 (8.8) ・幅3.7 ・厚さ0.4 ・重さ40g					2号住居跡
61	鉄製品 器具?	全長 (5.6) ・幅0.6 ・厚さ0.6 ・重さ17g					2号住居跡
62	鉄製品 直刀・鎌・釘	直刀：全長 (24.3) ・幅2.5 ・厚さ0.8 茎部片。鎌：全長 (7.4) ・幅2.9 ・厚さ0.5 ・総重量320g 直刀・鎌・釘が挿着している。					2号住居跡
63	鉄製品 鎌・鎌	鎌：全長7.5 ・鎌身幅1.0 ・厚さ0.3 ・茎部幅0.5 ・厚さ0.5。鎌：全長 (7.3) ・幅3.3 ・厚さ0.5 ・総重量50g 鎌・腰股鎌が挿着している。					2号住居跡
64	鉄製品 鎌	全長 (7.9) ・鎌身幅0.9 ・厚さ0.4 ・茎部幅0.6 ・厚さ0.5 ・重さ25g 腰股鎌である。					2号住居跡
65	鉄製品 鎌	全長 (7.0) ・鎌身幅3.7 ・厚さ0.3 ・茎部幅1.0 ・厚さ0.2 ・重さ30g					2号住居跡

※ () は復元値、< > は残存値



空地現況 (北東より)



同 検出状況 (西より)

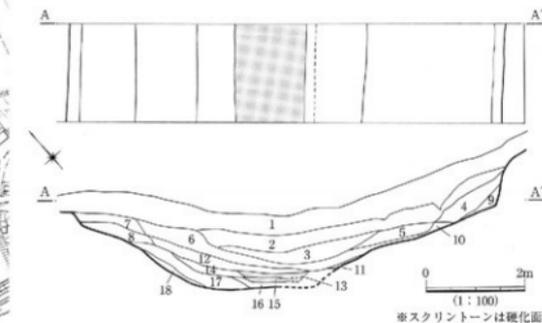
城館

小野川の河川交通及び東町方面への渡河地点を掌握するのに適した、鳥状地形の東端部に立地する。郭の平面形状は東西90m、南北50mの台形状で、南側に1号墳、北西に8号墳が位置する。今回、8号墳西側の現道の上に幅2mのトレンチを1本設定し、調査に臨んだ。この結果、上端幅8.5m、下端幅2.5m、深さ1.2mの空堀が検出され、現道下には空堀が埋藏されていることが明らかとなった。この空堀は、一定期間に亘って堀底を道としており、硬化面が確認されている。道の機能時期以降には、堀深い行われておらず、城館と同時期もしくは、終焉後に使用されたと考えられるが、空堀の位置を考慮すると、空堀掘削後ある程度の時期を経て空堀に道機能を付帯させたと判断される。8号墳は古墳としているものの、北へ延びた空堀を通路とした場合、8号墳を土台として隅櫓を構築すれば、堀底道を監視するのに適した場所に位置しており、道は城館機能の一部を担ったと推定される。また、この空堀は、郭の外側に穿たれていることから、これまでの発掘調査においては、中世に関わる遺構は確認されていないが、西に向かい順次下位の郭を配した可能性が考えらる。時期については、検出された空堀は、10m近い堀幅を有し、折れが確認されるなど中世の後半段階の遺構と判断され、Ⅲ項で述べた南北朝期まで遡れるかは現時点では不明である。



調査区位置図 (1:5000)

- | 番号 | 土質 | 表土 |
|----|------|----|
| 1 | 暗褐色土 | |
| 2 | 暗褐色土 | |
| 3 | 暗褐色土 | |
| 4 | 暗褐色土 | |
| 5 | 褐色土 | |
| 6 | 褐色土 | |
| 7 | 褐色土 | |
| 8 | 褐色土 | |
| 9 | 褐色土 | |
| 10 | 褐色土 | |
| 11 | 褐色土 | |
| 12 | 褐色土 | |
| 13 | 褐色土 | |
| 14 | 褐色土 | |
| 15 | 褐色土 | |
| 16 | 褐色土 | |
| 17 | 褐色土 | |
| 18 | 褐色土 | |



※スクリーンは硬化面

- 植物根混入著しい。しまり粘性なし。
 植物混入する。ローム粒まばらに含む。しまり粘性なし。
 2層よりやや暗い。ローム粒まばらに含む。しまり粘性なし。
 ローム粒・ロームブロックΦ1~4cm程まばらに含む。しまり粘性なし。
 ローム粒まばらに含む。しまり粘性なし。
 ローム粒まばらに含む。しまり粘性弱。
 ローム粒・粘土ブロックΦ1~3cm程数点含む。しまり粘性弱。
 ローム粒・ロームブロックΦ1~3cm程・粘土粒少含む。しまり粘性弱。
 ローム粒・ロームブロックΦ1~3cm程多量に含む。しまり粘性弱。
 9層より明るい。ローム粒・ロームブロックΦ1~3cm程多量に含む。しまり粘性弱。
 ローム粒まばらに含む。しまり粘性弱。
 ローム粒・砂粒まばらに含む。しまり粘性弱。
 ローム粒・砂粒・炭化粒含む。硬質。道路状部分。1cm位づつ互層を為す。
 13層より暗い。ローム粒・砂粒多量に含む。しまり粘性弱。
 ローム粒・砂粒・炭化粒含む。硬質。道路状部分。1cm位づつ互層を為す。
 ローム粒・砂粒まばらに含む。しまり粘性弱。
 ローム粒・ロームブロックΦ1~2cm程・粘土ブロックΦ1~5cm程多量に含む。しまり粘性弱。
 ローム粒・粘土密に含む。しまり粘性弱。

第16図 空堀

V 所見

第2・3次調査における成果について、これまで古墳・集落・城館に整理して概観してきたが、ここでは、①古墳の築造時期、②住居跡の形態、③台地の歴史的様相について所見を述べまとめたい。

①古墳の築造時期 2号墳は帆立貝式の古墳であり、築造時期を判断する材料は、箱式石棺と推定される主体部より、出土した須恵器の蓋が1点のみである。埴輪は伴っておらず、全体として出土遺物は少なく、端的に築造時期を決定付けるには弱いが、この須恵器の蓋は、湖西産でかえりを有し、天井部が欠落しているものつまみが突起状と推定され、湖西福年のⅡ期第4または第5小期の遺物と判断される。主体部の構築位置は括れ部上であり、いわゆる「変則的古墳」（常総型古墳）あるいは、「特異埋葬施設古墳」に包括されるものである。黒沢彰哉氏は常総地域における群集墳の分析を通じて「帆立貝式古墳では、括れ部に主軸と直交して置かれたものが古く、定形化した墳丘に埴輪列を伴うことが多い。主軸と平行になるものは、埴輪が部分的にあるものかまたはなくなってしまうもので、墳形も多様化し時期が降ることが考えられた」と『婆良岐考古』15号の「常総地域における群集墳の一考察」の中で述べている。これらのことや出土遺物を併せて考えると2号墳は7世紀前半頃の築造とみられる。

3号墳は前方後円墳で、主体部内より玉が出土している。その他の遺物については、後円部の周溝より6世紀前半の遺物が、括れ部より7世紀初頭の湖西産須恵器（平瓶・高坏など）が出土している。6世紀前半の遺物に対する理解は、周辺部での該期に盛期を持つ集落が確認されていることより、流れ込みとも判断されるが、後円部に集中することは不自然であるように思われる。更に、墳形を概観した場合、括れ部がしっかりと構築され整った形状を示す。このことから、墳形自体は6世紀前半の築造によるもので、この時点で埋葬施設は後円部に営まれ、7世紀初頭にそれまでの墳形を利用して新たな埋葬施設を括れ部に構築し、その際に供献された遺物が出土している可能性が考えられた。これらは推測の域を脱しないが、この場合後円部の埋葬施設は削平により消失したものと理解される。ただ6世紀前半の築造とした場合、埴輪は確認されないなど疑問点も残る。いずれにしても今回検出された埋葬施設の構築時期は7世紀初頭に比定される。

②住居跡の形態 住居跡の形態についてはすでに概観を述べているが、今回の調査の集落は6世紀の初頭に盛期を持っており、いわゆる初期竈の資料が得られ、TK208あるいはTK23と、TK47の須恵器が出土している。これらの住居跡の形態は、ほぼ正方形で出入り口が想定され、竈はこの出入り口の左右に貯蔵穴を伴い付設される。この形態は、茨城県教育財団により調査が行われた早合遺跡15号住居跡と類似するもので、同型の須恵器も出土していることから、県南におけるこの時期の資料を追加することができた。

③台地の歴史的様相 今回の調査及び第1次調査の成果を踏まえて、遺跡の立地する台地について概観すると、縄文時代早期末の茅山期において竈穴が検出されており、本台地における人の営みを初めて確認することができる。続いて数量的には中期前葉の阿玉台式の上器片が得られているものの、遺構は確認されおらず、周辺地域に集落跡などの埋蔵が示唆される。集落が確認されるのは、弥生時代後期においてであり、その後集落は断続的に営まれ、6世紀初頭に盛期を持つことが明らかとなっている。この時期より台地の南端では、古墳の造営が7世紀前半頃まで続けられ、再び集落が営まれるのは、今のところ9世紀後半に入ってからである。中世に至ると、文献史料により南北朝期の「厩」の存在が指摘されるが、城館として遺構が確実に認められるのは、中世後半においてである。

以上3点についてまとめてみたが、町の発掘調査も本地域に集中しており、古墳の調査も9基を数える。今後これらを体系的に捉え直すことにより、点であった調査事例がやがて線として繋がることを期待したい。

抄 録

フリガナ	タテノダイコフンゲン							
書名	楯の台古墳群							
副書名	第2・3次発掘調査報告書							
編著者名	関宮正光 高野浩之							
編集機関	山武考古学研究所 〒286-0045 千葉県成田市並木町221 TEL 0476-24-0536							
発行機関	江戸崎町教育委員会 〒300-0504 茨城県稲敷郡江戸崎町大字江戸崎甲2148-2 TEL 0298-92-4110							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	道路番号					
楯の台古墳群 第2次調査	茨城県稲敷郡江戸崎町 大字佐倉字楯の台2728外	08440	町022	35度 58分 29.5333秒	140度 20分 25.1529秒	19981024~ 19990206	1.470m ²	土砂採取事業
楯の台古墳群 第3次調査	茨城県稲敷郡江戸崎町 大字佐倉字楯の台 1926-7外	08440	町022	35度 58分 24.6382秒	140度 20分 23.6660秒	19991104~ 19991204	1.950m ²	土砂採取事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
楯の台古墳群 第2次調査	集落跡 ・古墳	弥生時代後期 古墳時代	住居跡(弥生時代 他) 土坑 古墳 (帆立貝式古墳・前 方後円墳)	3軒 3基 2基	縄文土器片(早・中期) 弥生土器片(後期) 土師器:高坏 須恵器:坏・蓋・高坏・平瓶 玉:ガラス製小玉、 水晶製丸玉、 琥珀製管玉・薬玉 その他:土玉・有孔円板	2号墳は、7世紀前半頃に築造された帆立貝式古墳で、3号墳は、墳丘の2次利用の可能性が想定されるが、検出された主体部は7世紀初頭の所産である。この主体部は、箱式石棺で、ガラス・琥珀・水晶を材料とした玉類が出土している。		
楯の台古墳群 第3次調査	集落跡	縄文時代早期 弥生時代後期 古墳時代 平安時代 中世	住居跡 炉穴 土坑 空堀	16軒 5基 10基 1条	縄文土器片(早・中期) 弥生土器片(後期) 土師器:坏・高坏・埴・甕・甔・甗 須恵器:坏・皿・蓋・高坏 鉄製品:鎌・鋤先・刀子・斧・鏃・直刀・釘・火打金・鉤具? その他:土玉・管状土錘・砥石・紡錘車	6世紀初頭に盛期を持った集落で、初期竈の資料が得られている。これらの住居跡からは、TK208あるいはTK23とTK47の須恵器が出土している。		

楯の台古墳群

第2・3次発掘調査報告書

印刷 平成13年3月27日

発行 平成13年3月30日

編集 山武考古学研究所

発行 江戸崎町教育委員会

印刷 株式会社 文化総合企画

千葉県印旛郡富里町日吉台1-23-12

TEL 0476-93-0593